紹介

日本古代家族　藤間生大著

上代史の構造的研究に新生面を開拓されてゐる著者の近業で、此の方面の新研究の成果を廣く取入れられた力作である。

先づ第一章ではわが國古代（大化改新前後より平安末期迄を指す）社會の共同體（郷戸）に對して、曾つて石母田正氏が提出し著者も之を用ひた「世帯共同體」なる範疇の歴史的意義が不明確であることを批判し、次で第二章では右の不明確が共同體相互間の關係の不明確に基くものであるとして、律令の規定の裡から「血縁的な關係」と「地縁的連帯法」とを擧げ、更に郷戸の耕地處分權の薄弱が大化前代に於ける郷戸の耕地共有制を示すとし、郷戸が獨立的な位置を獲得する以前には「郷戸を構成要素・單位とする」「親族共同體」が存在してゐたとして、之を「氏族共同體と村落共同體の中間的な構造と形態をもつもの」と規定する。

第三章ではわが國の親族共同體の發展が西歐に見られる様な獨立した單婚家族の聯合からなる村落共同體に移行せず、數個の單婚家族或は「破片的」小家族から成る「郷戸的家族制」を成立せしめたことは、土地割替制の行はれなかつたことと、土地占有の主體としての「郷戸」の「主體性の強さ」を發生したためとに依るとし、之を「家族共同體」と名づける。

第四章古代の家族構造・第五章古代家族の終焉は本書の半ばを占め、從つて著者が最も力を入れられた部分であらう。第四章に於て著者は大日本古文書所收の下總・筑前及び豐前・美濃等の戸籍を資料として之を凡ゆる角度から檢討して精緻な分析を示される。その結論だけをいへば、この三地方の特色が「親族共同體の崩壞に始まつて奴婢を基抵的な家族構成員としようとする古代家族の成立に終る」共同體發展の系譜を表すとする。そして「古典的な古代家族」「寄口を含んでゐる大家族」及び「小家族」の階層的な存在が、わが「古代」に於て「古代家族」が普遍的となり得なかつたことを示すものとし、生産上の働き手としての「奴婢」の意義の低さと反對に「寄口」の重大さとを指摘してわが「古代家族成立過程の特性」としてゐる。第五章では奈良・平安時代莊園制の發展によつて「家族共同體は次第に家父長的な古代家族に轉化して行く」とし、しかもかやうな大家族が「共同體的な體制の強い殘存と古代家族制の未發展により」多くの奴婢を使用する家父長の直營大農業を發展せしめず、「古代家族」によつて「身柄を所有」されてはゐるが一應それから離れた「百姓」の自營的經營に任せられ、漸次その「百姓」の身分が向上して行く。かくて「わが國の古代社會はギリシヤ・ローマ的な華かさをもち得なかつたとしても、それらの國に於ける」如き「墮落をもつ沒落期を呼び起すことなく、古代家族の發展も亦極點のところまで行かないで次第に解體する方向に赴くこととなつた」とする。

この方面について知識の乏しい評者は立入つた批評をなすことは出來ないが、問題があるとすれば第四・五章であらう。殊に「平安時代の中期以後に於て」「古代家族」が「積極的に活躍した」とされることは、著者の規定される「古代家族」の概念よりして餘りに時代が降り過ぎてはゐないだらうか、この點に於て著者と見解を異にする淸水三男氏の「上代の土地關係」を併讀することが有意義である。ともあれ困難で地味なこの方面の研究に弛まず精進される著者の努力には深く敬意を表するものである。

（A5版・假綴・一七六頁・伊藤書店・價一・八〇）（藤谷俊雄）

音譯蒙文元朝祕史

東洋文庫叢刊第八　白鳥庫吉譯

內藤湖南先生によつて早く我國に蒙文元朝祕史が將來せられた事は實に我國蒙古學界の幸であつた。直ちに愼密なる那珂通世博士の譯注「成吉思汗實錄」出でゝ我が學界は一躍して世界の學界を脾睨し得るに至つた。和田淸博士が「東亞史論藪」（二四八頁）に於て「一代の碩學が精力を傾倒した結果は、此の最も暗黑なる一時期に莫大なる光明を投じて、後人追從の途を拓いたのであつた」と云はれた如く、これより我國の蒙古學界は駸々として進んだのであつた。然も間もなく原本は葉氏觀古閣に於て影刻刊行されたが、之を語學上に利用されたのはたしか羽田亨博士位であつたので、余も亦驥尾に附して「元朝祕史蒙文札記」と名附くる拙い覺書を「東亞研究」誌上に書いたことがあつた。然し以後も矢張り史學の方では盛んに利用されたのであつた。

語學としても研究されなかつたのでないらしい。漢字音譯の復原を企圖せられてゐる話は度々側聞してゐたものである。だからヘエニッシュの復原文を見たり、ペリオの復原譯注を聞いたり、陳垣庵の校勘を知つたりすると、一歩を先に蹈み出してゐる我國蒙古學界の爲めに氣をもんだのも其處であらう。今や茲に白鳥博士の音譯を得て我々はやつと安んずるを得るのである。斯學に知名の俊才の輔助による三十年の勞作である。慶賀に堪えない。今よりは史學に於ても語學に於ても之を底本として依り得るは幸とすべきである。

この音譯本は葉氏觀古閣刻本を底本として精密なる校訂を加へ、蒙古原文を羅馬字に音譯句讀したるものを對照せしめたもので、尙ほ後に索引が出ると云ふ。若し語の索引をも含むならば蒙古古語の研究に便利を與ふること大なるものがあらう。期待に堪えない次第である。

蒙文復原の企圖は早くもボズドネエフによつて試みられたが完成しなかつた。その出版せられたる分も極めて珍本であつて中々我々の眼福とはならない。然しボ氏の他著に於ける引用、又ボ氏の音譯を利用したブロオシェのラシッド集史序論などの引用、などで一斑は推し得られる。ウラヂミルツオフの「蒙古社會制度史」にも引用文があるが、これはボ氏に據つたか否やは詳かでない。此等零細なる引用を以て白鳥音譯と對照してみるならば、ボ氏ウ氏共に善を盡し美を盡してゐないことは明瞭である。兩氏共